

祖父との思い出

葛岡 昭男

私の祖父「葛岡一郎」は昭和二十七年五月十三日、半身不随の脳卒中が悪化して他界したもう六十年も昔のことである。

郷里の田舎では毎年旧暦（如月）二月初めの午の日には稲荷の祭日であり「山の郷」（地名）の稲荷神社に大勢の人々が参拝してとても賑やかである。私に物心がついた時は既に祖父は脳卒中が発病していて半身不随であった。祖父は私を大変可愛がってくれていて麻痺した身体にも関わらず杖をついて「山の郷」の稲荷神社に連れて行ってくれた。

稲荷神社に続く畦道の両側には沢山の露店が並んだ。石段を上った稲荷神社の縁の下の土を田畑に撒くとその年は豊年万作になると伝えられていて参拝客は社務所に予約しておきお祭りの当日宮司が祈願してくれた有難い土を大事に持ち帰った。

境内には「ホウネングサ」といって柳の枝に紙細工の「小判」「鯛」「おかめ」「えびす大黒」を糸で吊るした縁起ものの飾りが売られていた。

そして収穫の秋には五穀豊穣に感謝して村祭りが行わる。鎮守の神様の社にはのぼり旗が立てられて村人達は村を出ていった人達（家督を継がない次男や嫁いだ婦人等）を生家にお迎えして神酒をふるまいご馳走をつくって収穫のお祝いをする風習が残っていた。五歳のころだったと記憶しているが稲荷神社のお祭りの縁日で、おもちゃの自動車を売っている露店商の前に座り込んでネジを巻いて走るおもちゃのバスが欲しくてどうしても買って貰いたかった。祖父は小銭をもっていなかった。のでジープのおもちゃを買ってあげるといったが私は欲しくなかったのだ。

幼い頃のことであった昔の記憶だが村の長老たちに「可愛い」と言われたことを思い出す。「うふふっ」という私の幼少の頃の含み笑いを村人は「先祖還りの童子」と言って決めつけ祖父は私を自慢の孫と自負していたらしい。ひよっとしてお茶目に見えたりするからか、はたまた無防備なところがあるからか、それとも（まさかそんなことはあるはずもなからうが）初々しいところがあるからか。

これは当時の私にとって今も謎である。でも、そう言われてうれしくなくはない。「可愛い」？「可愛い」と言えば、赤ちゃんのよちよち歩きとか、なにかたよりなげで乳臭いみどり児のイメージを思い浮かべるのだが、いまどきの「可愛い」はむしろ、ぬいぐるみやキャラクターグッズの類に向けられることが多い。その頃「可愛い香り」とは。「可愛い匂い」であって今の時代では二極化していると某哲学者の論評を読んで私も「可愛い匂い」の意味が少しづつではあるが納得出来た。芳しい香り、旨そうな匂いと、こげ臭さ、腐臭、加齢臭、体臭といった異臭など様々だ。「におい」がそのように、芳香として「匂い立つ」ものと、できれば断ちたい「臭い」とに引き裂かれている。えもいわれぬ曖昧な「におい」を嗅ぎ分ける力、それを現代の私たちはずいぶん落としてきている。

今日では、ひとを陶然とさせる芳香のほとんどが調合されたもの、たとえば香水やデオドラント商品のような合成化合物だ。とすれば、芳香はデジタル、異臭はアナログというふうな分類になるそうだ。「かわいい香り」はひとのいのちをはるかに超えた時間の澱みをたっぷりと湛えている。そういう悠久の時間の中に私達は置かれている。

当時の祖父はそんな孫の私を香りのごとく溺愛し「可愛い香り」として置き換えた。祖父に強請れば何とかなることを悟った私は駄々をこねて泣きじゃくったのである。

はつきり覚えていなかったが最後はジープの自動車を買ってもらい帰宅した。家に着いてから父親にバスのおもちゃを買って貰えない悔しさを話したところいきなり頬を平手打ちされた。「何故爺ちゃんの言う事を聞かなかったのだ」と・・・「もつと小銭を持って行けば良かったなー、昭男には済まないことをしてしまった」逆に祖父が私に詫びていたその昔、脳卒中は中気（ちゅうき）とか中風（ちゅうふう）と呼ばれ、人々から不治の病として恐れられていた。中気の『気』は、体の内部環境のようなもので、中気は、気が当たって倒れる病とされてきたのだ。当時は医学が進んでおらず、自宅療養しかなく穏やかな気候と自然に囲まれた中で療養することで自然治療力を高める方法しかなかったらしい父にしてみれば不自由の身を押し切って孫の私をお参りに連れていってくれたのに我儘の私に激怒したらしいのである。

祖父は早い頃に伴侶（妻）を亡くしたが長男だった私の父を含め、四人の子供を男

手で育てたと言う。大人になって母から苦勞話を聞かされたが、幼少の私には知る由もない。戦後の食糧難の時代の中にあり祖父は祖父なりに家族の長老として絆の深さを采配していたから父も母も子育てよりか祖父を中心とした暮らしを余儀なくしていた。

母からの話によれば父が十七歳の時に母親がなくなったので祖父も大変であったらしい、父も母親のいない寂しさもあったが、親代わりになって二人の妹と弟を世に送り出すのに必死であったそうである。叔母さん、叔父さんにしてみれば父は親代わりであるので、私の知る限り小うるさい叱咤を発していた事を幼ながらも覚えていいる。当然ながら嫁いで来た母も苦勞ばかりの日々だった。祖父の事が原因で父母はしよっちゅう口論していたことが今も脳裏に残っている。夫婦喧嘩をしながら正月の餅つきをしていた時である。怒った父が側に抜いてあった木製の下駄を母になげつけた。「かあちゃんが危ない！」と、走り寄った私の眉間にもろに当たってしまった。額から血が吹き出たがお寺の父の同級生が偶然側に居合わせたので介護してくれたが、今も私の眉間には傷跡が残っている。「馬鹿者！・・・祖父は父を激しく怒鳴った。あれ以来父は物を投げつける事は一切しなくなった。

稲荷祭りに連れていってくれたが、祖父はバスで三十分程の隣村に嫁いだ長女の唐鎌菊江さん（私の叔母さん）の所に行くことを楽しみにしていた。

両親は半身不随の身を案じて私と一緒に付けて娘の嫁ぎ先に行かせたのである。叔母さんの家は長南町千田と云って養蚕をしていたので叔母さんもととても忙しかった。叔父さんは棟梁大工であったので家にいる時間は少なく逆に年寄りが家の中を取り仕切っていた。叔母さんは祖父を連れてきてくれた幼い私に「良くきてくれたね」「お爺ちゃんを連れてきてくれてありがとう」と云って必ずお駄賃をくれたことを覚えていいる。

祖父は男ばかりの三人兄弟で祖父を筆頭に二人の弟がいたが次男（和一）は同じ村に世帯を持たせた。

三男（三知雄）は東京に出て板橋区にある製薬会社で修行しながら薬剤師となり某製薬株式会社の小豆沢研究所に勤めていた。三男（三知雄）は自宅療養を余儀なくする兄である祖父にいろいろと協力を惜しまなかった。薬については詳しいノウハウを持ちあわせていたので、半身不随の祖父に効く薬を頻繁に届けてくれた。はつきり覚えていないが飲み易い錠剤は良く効くらしく常備薬として居間に置いて水な

して服用していた。薬効があったのだろう、発病してから役十五年もの長い間祖父は進行しない状態で生き続けられたのである、しかし晩年は老が進み、炬燵の中の炭火に脚を落としてしまっても、持ち上げられない程に病が進行してしまった。農作業から戻った父母が顔を見合わせ「いよいよよか！」と溜息を洩らした。気丈な祖父の目に溢れていた涙が着ていた浴衣の襟を濡らした。居間にある仏壇の中から木漏れ日のような後光が暈に射し屋敷に続く背戸山には風が騒いでいた。父母の重苦しい表情に幼いながらも祖父との今生の別れが近づいている気配を察知した。

亡くなる一ヶ月前からは終日床に伏すようになり、母は私達四人の子供を育てながら祖父の介護も加わり、食事、洗濯、家事、農作業にと体の休まる時間はなかったと云う。

亡くなる一週間前からは枕元に筆と硯を置いての筆談となり「昭男心配で傍から離れられない」と書いて見せた。それから三日後に、父を含む四人の子供達に看取られて六十五年の生涯を閉じた。

昭和二十七年五月十五日、眩しいばかりの若葉のかおる山村の自宅で葬儀が営まれた。祖父は座棺といって正座した姿で棺桶に納まった。日蓮宗の菩提寺である三橋寺の住職であった加藤静浄和尚は生前の祖父の功績を労い最高の衣を着用して経をあげてくれた。棺は村の若者に担がれ共同墓地に掘られた墓穴に土葬で埋葬された。

三男（三知雄）の話によれば、合併直後の「日吉村」は合併前の農業用水の利用方法が解決していなかったので千葉県庁におもむき、初代民選千葉県知事の「川口為之助翁」を訪ねたりして、村民のために奔走したそうである。祖父は私の心に悠久のままに「心の香り」として宿っている。

今年七〇歳の齢に達した。千葉県の県木の「檜」と共にふる里にある老木の桜が静かに散り始めています。あんなに思いきって散れるのは思いもよらぬ程遠い空間にまで根が届いているからに違いない！物言わぬ樹木から人へのひそやかな言葉のように耳を澄まし、己の生命を染め上げている。

祖父と別れてから六十年の歳月が流れた。既に父母も黄泉の国に旅立って歲月の速さを感じる。目の中に入れても痛くない五歳の孫と当時の私が重なる。

「人生の最後に神がくれたもの爺と呼ばれる孫の寄り添う」

プロフィール

氏名 葛岡 昭男（くずおかあきお）（男）

略歴 元証券マン・作詞家・エッセイスト

日本歌人クラブ会員・新アキラギ短歌会同人

日本音楽著作家連合会員

著書 珠玉の政治思想（鹿島出版）

ゆくりなくも（鶴書院）

岳父と枝豆（鶴書院）

蘇生の楨（鶴書院）

私の母物語（日本文学館）

文部大臣賞 読売新聞社賞 産経新聞社賞

流山市長賞

RKB毎日放送賞 他

受賞